

ピュー（古代ミャンマー）のビーズとコインにみる 地域の広がり と 東西交易

—ピュー文化に特徴的なビーズとモチーフに注目して—

加 納 弘 勝

はじめに ミャンマーのビーズとの出会い

流入・流出の移動経緯を具体的に追跡でき、地域間移動の仕組みを凝縮された形で伝えてくれるビーズは、第1に、ガラス製のビーズである。ガラスは紀元前2500年ころに西アジアで発明され、インドでは紀元前1100年ころからビーズ製作に用いられた（Ray, p.229）。貴石に代わる新しい素材のガラスを用いたビーズは、大量に移動し、歴史のなかで主たる生産地を変遷させながら大量に製作されてきた。しかも、製作過程で当該地域に在った素材を使うため、組成分析によって産地が特定でき組成分析を経なくても、ビーズの形態やモチーフから出自が解明できる。

流入・流出の移動経緯を具体的に追跡できるビーズは、第2に、当該地域で製作されたことを確認できる特定のモチーフをもち、地域のなかで人びとの願いと地域の社会関係を体現したローカル・ビーズである。当該地域に独自のモチーフをもつビーズは、産出地域と地域の広がりを伝える。また、特定地域で製作され特定のモチーフをもつコインは、独自のモチーフをもつビーズを越えてリージョナルな広がりを見せることがある。古代においてインド・パシフィック・ビーズは、前3～2世紀にはインド洋ネットワークのなかでアフリカ東岸や南部に移動し、また、朝鮮や日本まで移動した。西のローマン・ビーズや中東のアイ・ビーズもインド洋ネットワークのなかでアジア諸地域に移動した。これらは、遠い距離を移動した古代のグローバル・ビーズであった。

本稿では、ミャンマーへのツーリズムで出会った2種類のビーズと、古いビルマのコイン1つに注目する。今日、グローバル化時代のツーリズム

は現地とのさまざまな出会いを可能とし、文化的なモノに注目すれば独自の視点から地域の人びとへの接近を可能にする。また、近年の民族考古学（ethnoarchaeology）も、ビーズの製作や技術に研究を限定せず、「広範囲な交易ネットワークのなかのビーズ」に注目する（Ray, pp.227-228）。

ミャンマーで出会った2種類のビーズとホーチミンで出会った古いビルマ・コインは、古代における地域の広がりを伝える。2種類のビーズの第一は、ローマン・ビーズ（ローマ期に製作され各地に拡散した）やササン・ビーズ（4～7C）などでミャンマーの地に流入した古代のグローバル・ビーズである。ツーリストも少なく物価も安いこの地に、近年流入したとは考えられない。

第二は、ビルマの地でピュー期（3～9C）に製作された、青いガラス製の「輪」や象の形のビーズなど、特徴的なピュー・ビーズである。古代アジア・ガラスに似た青いガラス製ビーズなど特徴的なモチーフのローカル・ビーズに、ヤンゴンやピューの古都スリクシュトラというローカルな地（今日、近郊の都市ピエ Pye）で出会った。ホーチミンで出会ったピュー・コインは、ホーチミンの歴史博物館でも、ベトナム南部の古代港市オケオ（2～7C）で発掘と展示され、ビルマ・ベトナムという古代アジアの地域の広がりを凝縮する。

特徴的なモチーフをもつビーズとコインに注目し、ピュー期におけるこれら文化的なモノの移動経路と地域の広がり、流入と製作の関連を確認する。具体的には、第1に、特徴的な古代ビーズが、ピューの都市国家（城市国家、伊東, p.114）やそれ以前の青銅器文化出現の地で製作された経緯を検討し、同時に、とくにピューの中心スリクシュトラにグローバル・ビーズや外国コインなどが流

入した様子を確認する。第2に、ピュー・コインがピュー都市国家やそれ以前の地で製作され、このコインがアジア地域とくにオケオに集積された経緯を整理し、地域間の繋がりを想定する。第3に、古代においてマレー半島が東西交易の焦点となり、半島内部に成立した交易ルートを整り、交易ルートを経てインド・パシフィック・ビーズやローマン・ビーズ、ササン・ビーズなど西のビーズがアジアの地に流入し、主要な交易拠点で製作され土着化ビーズも発生したことを確認したい。

この3つを検討することで、第1に、ミャンマー南部から伸びる2つの交易ルートは、ピューの地にグローバル・ビーズが流入し、同時に、ピュー・コインがオケオに流出し集積するときに、考慮すべき陸のルートであったこと、第2に、海洋交易で繁栄したピュー城市国家の地で出土する2種類のビーズは、アンダマン海を結ぶ海洋ルートに繋がったエーヤワディー（イラワジ）川を経て流入したこと、そして海洋ルートはマレー半島内部に成立した交易ルートに繋がっていたことが判明し、古代における地域の広がりを文化的なモノは伝えてくれる。

1 古代ピュー・ビーズと地域の広がり

(1) 現地で出会ったピュー・ビーズと出現への過程

2世紀前後から城壁で囲まれたピューの城郭都市は、チベット・ビルマ語族のピューの人々が中国南西部からビルマ中央部に流入し、これにともなって成立した。5～7世紀ころには城市スリクシュトラが繁栄し、ハリンに中心が移行するなかで崩壊する9世紀まで統治した。

古代城市スリクシュトラの地で出会った古代の典型的なローカル・ビーズは、(イ)象など動物ビーズ(1図⑩⑪、以下同じ)、(ロ)青ガラスのストゥーバ(パゴダ)や蛙風の護符、花卉型やゲーム・ピース(⑫⑦)、(ハ)ピューの小さな金ビーズや極小の管(⑬⑱)、(ニ)1～6円紋のサイコロ2つと深紅色のガラス・ディスク(④⑤)、(ホ)面取りしづく型や牙型ペンダント(⑮)、(ヘ)カーネリアン製でトラを描いた印章などである(⑥)。ヤンゴンでは、象のビーズ以外に、深緑のガラス製の大きな(腕)輪(⑧)やトラのビーズ(⑥')にも出会った。なお、明るい金(⑰)と暗い金(⑱)、製作時に混ぜた金属による色合いの相違であろう。

スリクシュトラで出会った古代のグローバル・ビーズは、典型的なローマン・ビーズである(ホ)金トンボ(①)であり、双子や五つ子の連結玉もある。金トンボとは、金色のトンボ玉を意味し、製法は二重になったガラス菅の間に金箔を入れ、適当な長さごとに菅を上下から溶解圧縮し玉状に切断する。このためゴールド・サンドウィッチとも呼ばれ、玉が連結したままのときは双子などになる。ローマンの製作時期は一般的に1～4世紀とされる(加納2011,pp.70-73)。(ヘ)青や青の胎に縦線が入った小さなローマン・ビーズ(②前例3つ、以下、ローマンと略)である。

(ト)多色で黄の大きなアイが配されたササン・ビーズ(②)もグローバル・ビーズであり、ササンの製作時期は一般的に4～7世紀とされる。ヤンゴンでは、モザイク・ビーズの他に多くのササン・ビーズを繋いだ連(③)に出会った。モーラミヤイン(2図参照)から出たといわれ、上下二段にモチーフが描かれたササン・ビーズは他所でほとんど見られず、細長く斜め線の入った茶や青のササン6つも含まれる。また、ヤンゴンで出会った首飾りは、イスラム地域のアイ・ビーズとは違う、特異なアイ・ビーズを連のトップにもち(⑯)、ピュー・ビーズとは色の異なる二本の長管ビーズ(12号)を繋ぐ。特異なアイ・ビーズは、ざらつき感のある黒の地に、アイ用の小穴を掘り灰色の素材を入れ、そこに黒茶色のアイを配する(⑯')。土着化されたアイ・ビーズと思われる。

代表的なビルマのビーズには、植物の液で腐食させ白の線を描いた、赤いカーネリアンや黒のメノウ、石化したやしの木に十字モチーフを描いたブンテックがある(補①)。これらビーズは、ビルマからタイに流出したとも、インドで製作され各地に流入したとも言われ、ガラスと異なり素材から産地を特定することは困難であり、また、フェイクも多い。なお、これらビーズの属性や写真は、加納著『世界のビーズ・地域の織物一人ひとりの願いとアイデンティティ』に記述し掲載している。

ピュー・ビーズ出現への過程

城市国家スリクシュトラが5～7世紀に繁栄する以前から、いくつかのピューの都市はエーヤワディー川沿いに存在し、海外と交易を行ってきた。中国名で擘と称されたピューは、2世紀初めに後漢へ陸路でローマ人の妖術師を献上し、また、ベトナム中部経由の海路で朝貢した(伊東,p.112)。

ピューは、西のローマにも東の中国にも広がりを持っていた。なかでもスリクシュトラは河口に近く、海洋交易に繋がる外界との出口を押さえ強力であった。インドからアラカン山脈を経る陸のルートは、肥沃なビルマ中部とインドを繋いでいた。

ピューに先立ちサモン青銅器文化が、ほぼ前700～400年ころミャンマー中部マンダレー近くのサモン溪谷に花開いた (Moore,2007,p.99)。この溪谷を流れるサモン川は、南に下るシタン川の北にあり、他の川と異なり北に向かい、マンダレー近くでエーヤーワディー川に合流する (2図参照、主要な地名を日本語と英語名で記した)。西のポッパ山は鉄や準(半)貴石が豊かで、東のシャン高地は銅を産出し、北ではハリン近くの豊富な塩地域を経てバモーに至り雲南と交易した (Moore & Maung,p.10)。西ではチンドウィンとその西の地域からカーネリアン、ブンテック、メノウを得て、これを研磨したビーズやガラス・ビーズ、ディスクや(腕)輪がサモン溪谷から出土する。出会ったディスクや輪は、この類例であろう。ワディーも、銀コインや象ビーズを出土する (Moore & Maung, p.11)。

サモン溪谷では、ローカルな製鉄の証となる砂岩製鋳型の発見が数例に限られるのと対照的に、カーネリアンや緑の玉髓などを交易で得てビーズに製作したことを示す証拠は多い。成形され研磨されたビーズは、その後、青銅器時代の墓や500年ころまでの城壁で囲まれた各地の都市に滞留し、あるいは、タイに流出した (Moore,2007,p.100)。

カーネリアン製のトラのビーズは、ハリンのほかサモン溪谷の南で青銅器時代のサイト、ペインナカとミョ・フラ (Myo Hla) で出土する (サイトの位置と属性、2図で前者は■[～千年期]、後者は▲[青銅器サイト]などで表示、2図参照)。トラのビーズは、タイなどでも出土しパキスタンのものより大きく、跳躍する姿に顕著に変わる (Tingley,p.48)。子をくわえたトラのモチーフは、サモン溪谷で発掘されミャンマー以外で類例が無い (Moore,2007,p.101)。ヤンゴンで出会ったトラのビーズや、スリクシュトラで出会った、子をくわえたトラのモチーフの印章 (1図⑥) は、これらの類例であろう。

サモン文化 (BC700～400AD) においてガラスは、ビーズだけでなく、儀式用の平らなディスクや大きな輪に用いられた。青のガラスの「輪」や

青銅の動物は、デザイン的に優れ技術的に洗練されていた。青のガラスの輪は、カンボジア東部やベトナム西部で発見される前400～前200年の青いガラスの腕輪に似る。同様な石の輪も多数出土し、サモン溪谷のペインナカでは、市壁の下に儀式用の「石の輪」と埋葬された遺体が発見された。

ペインナカの直ぐ北のミャウク・ミー・コン (Myauk Mee Kon) では、雲南州昆明の南に広がる滇池 (ティエン、Dian) 周辺で前4世紀～1世紀に発展したティエン文化のモノと同様に良質な青銅楽器が、稲束風の青銅器 (kye doke) を含む地層を覆っていた (Moore,2007,p.123)。このミャウク・ミー・コンは理想的な交差点といえ、インレー湖にも北ではムセ (Muse) やさらには雲南にも行けた。サルウィン川もシュエリ (Shweli) 川も中国から流入し (Moore & Maung,p.13, 4図参照)、中国国境近くのバモーはエーヤーワディー川の上流沿いにある容易に中南部に結びついた。

サモン溪谷で出土した青銅器は、川や陸路による雲南と交易により雲南省 (昆明の北) などから流入した (Moore,2010,p.122)。出土する楽器、儀式用ひしゃくは前1000年ころのものであり雲南で見られ、葬儀もサモンと雲南では類似する。しかし、サモン文化は、雲南と文化からインドの鉄器文明 (700～350BC) に傾斜を強めた (Moore, 2007,p.103)。

(2) 市壁をもった城市国家スリクシュトラの成立とビーズに凝縮された社会

スリクシュトラやハリンなどビルマ中南部の都市は堅固な城壁を備え (3図参照)、1～2世紀のインド中部や中南部の都市遺跡に類似する。スリクシュトラは、エーヤーワディー川の東6キロの地にあり、豊富な金やスズの交易で1～2世紀に繁栄した港市タトーンなど、南部の三角地帯 (スヴァルナプーミ、金の土地) 後の主要な交易センターであった。

伝説では、プローム (ピュー) の王は、エーヤーワディー川中流域ベイトノウの繁栄を聞いて町を攻撃し、敵を撃退できるとされた「魔法のドラム」 (ベトナムの銅鼓) を破壊した (Aung Thaw,p.3)。王女を捕虜とし後に結婚した。今日でもスリクシュトラの市壁の南では、ベ (ペ) イタノウ王女の墓地がある (3図参照)。ベイトノウの繁栄 (1～4C、あるいはBC2～5AD) は、ハリン (2～

9C) やスリクシュトラ (5C ~ 8C) より早かった (Moore, 2004, p.6)。

スリクシュトラは、堅固な壁 (長さ 14.6^{キロ}; 航空写真より測定) で囲まれた円形都市で、32 の主門と 32 の小門、四隅には塔があった。門にはシンボリックな壁のくぼみも含まれ、都市の正統性を示すために 4 の倍数をもとに配置された (Moore, 2004, p.23)。地図では 25 の門が確認できる (Luce, II, 4Plan, 3 図写真参照)。エーヤーワディー川から 6 キロほどの地にあった。インドの都市防衛と水管理法に準じ、北から川をひき込み分流し壁の周りに堀を設け、壁は東部以外では 3 重になり、壁に沿って約 15 ~ 20^{メートル}ほどの堀が 3 重に存在した (O'Reilly, p.18)。円形都市の直径は 3.2 ~ 4 キロで、市域は約 1480^{ヘクタール}あり、ハリン (208^{ヘクタール}) やベイトノウ (292^{ヘクタール}) と比較し著しく広い (Moore, 2004, p.1)。なお、市域は 30 平方キロともされる (Moore, 2007, p.167)。市域の中心に王宮があり堀を備え、二つの寺院もあった (3 図参照)。円形都市の半分、北と東には水田があり戦争のときには住民を養った (Luce, p.52)。

スリクシュトラは、呪術的な巨石信仰と密接に関わり、市壁の外に 3 つの巨大なストゥーバ (パゴダ) が建立された。最も大きな南のパウ・パウ・ギーはレンガ製の筒状の塔で、高さは 153 メートルである (O'Reilly, p.19, 3 図写真)。北東にパヤルマール、北西にパヤギが配置された。

ピューの人々は、南部チンや古ビルマの人びとのように火葬し、市壁の外の大きな墓地には土製の甕棺をレンガの台に置いた。甕棺には、灰とともに金の指輪、星型の花、文字の記された金や銀の箔、銀のコイン、本翡翠 (jedaite)、ほかに護符のために鉄、釘、ピンなどを納めた (Luce, p.53)。鉄は護符の力をもつと信じられ、都市の門の外に大きな釘 (18 ~ 28^{センチメートル}) を刺した。なお、アンダマン海に面した南部のダウェー (現タボイ) の棺には、インド・パシフィックの首飾り 1 ~ 5 連が納められていた (Moore, 2007, p.231)。

市壁の南東側の村では、5 世紀末の銀メッキの筒状遺物箱が発見され、多くの金や銀のハスの花、玉や蝶が埋葬されており、緑のガラス製の仏陀像 (頭部 5^{センチメートル}) や、本翡翠の象や玉髓の亀、多数の石製ビーズ (1 図⑩⑪) が出土した (Moore, 2004, p.17)。

石製とガラス製のビーズ

スリクシュトラ以前のサイトにおける出土品

は、ビーズの石製とガラス製の関係を伝える。ベイトノウ (既述、2 図参照) は、スリクシュトラの北に位置し 1 ~ 5 世紀のサイトである (Glover, 1991, p.119)。この都市は、スリクシュトラとほぼ同時期に活動し、ハリンほど離れていないため文化的な結びつきが認められる (Aung Thaw, p.1)。エッチド・アゲート (メノウ) と多くのインド化されたピュー・コインが出土した。考古学調査 (1959 ~ 63 年) では、708 個のビーズが出土し、669 個はテラコッタで他はアゲート、アメジスト、カーネリアン、水晶であり (Aung Thaw, pp.49-53)、ガラス・ビーズは発見されなかった。

北西部の低地チンドウィン (Chindwin) で出土するビーズは、一般的にテラコッタや石製の輪であり、対照的にサモン渓谷の青銅器・鉄器時代のサイトで出土するビーズは、準貴石、ガラス、時に銀や金で製作され、渓谷南のベインナカでは儀式用や装飾用に石製やガラス製の輪が出土する (Moore, 2007, p.118)。渓谷の少し北、シュウェザヤン (Shwezayan) 石器時代のサイトからはテラコッタの輪が出土する。緑のガラス製の輪は、マンダレーと極近いサガイン、ベイトノウ近くのマグエ (Magwe) で出土する。空色、緑がかった青、暗い緑のガラス製の輪や丸い青銅の輪がときに出土する。ハリンの市壁内や近郊の村でも、サモン文化に特徴的な青いガラス製の輪が出土し、同時に、母の女神像や稲を束ねた形の青銅線の束や、カーネリアンのライオンも出土する (Moore, 2004, p.20)。ヤンゴンで出会った青い大きなガラス製の輪 (1 図⑧) は、この経緯を凝縮する。

動物の形をしたビーズには、象、トラ、ライオン、座った人、雄牛、アヒル、尻尾の長い鳥、亀、犬、モルモット、サイ、ワニ、魚、壺やふくろうなどの形である (Moore, 2007, p.116)。牙をもった象は、動物ビーズのうちで最も一般的であり、ピューやサモン渓谷のサイトで発掘される。緑の象のビーズは、玉髓、緑のガラス、水晶製である。象のビーズはピューに独自のビーズであり、埋葬者の首のまわりから出土する。ヤンゴンやスリクシュトラで出会った象など動物のビーズは、このように用いられたのであろう。ガラス製のストゥーバ、蛙や鳥、果実や分銅に似た小さなガラス製品も同様に用いられたかもしれない。

ミャンマーの多くの古代都市では、アゲートやカーネリアン製の小さな印章や指輪が数百単位で発見される。指輪や石に、牛、馬、ライオン、双

頭のライオン、一角獣、祈る人、稲妻、巻貝などのモチーフが描かれている。輸入された異国風の印章もある。指輪は、悪魔や病気に対する護符として用いられ、大半は子供用で、当時、子供の死亡率が高く護符として用いられたためであろう。

小さな金やガラス・ビーズ、コイン、印章、金、銀、小さな銅の指輪は、穀物の豊作を願う儀式で畑に撒かれたと、現地の収集家がいう (Than Htunm,p.99)。ミャンマーの王は毎年、宮廷の鋤起し儀式を行い、この伝統は古くピューの時代にも実施された。これだけで出土する金ビーズの多さを説明できないけれども、王や宮廷家族の成員が畑に金ビーズや貴石を撒いた可能性は高い。スリクシュトラで出会った金ビーズ、丸形、円柱、先の尖ったランプ形 (17)、また、細線細工の球や土圧で潰れた微小粒飾り小円、さらに多数の極小の丸や四角の金ビーズ (17)(18) はこの地で出土し、この説明を裏づけるように思われる。

スリクシュトラで出会ったサイコロは立方体や直方体で、二重の円が1～6つ描かれる (4)。サイコロの起源がインドや中国にあり、双方にピューは密接な関係を有した。古いモノと想定すれば、古い交易関係のあった雲南や中国系のモノかもしれない。

(3) コインのモチーフが伝えるピュー・コインの広がり

スリクシュトラは、ヒンドゥー教から仏教への推移という新たな宗教的な意味を付与され、現世と来世の調和を信じた仏教徒によって建設された (Than Htunm,p.82)。7世紀にスリクシュトラは100人ほどの僧を抱え、ローカルな僧が多く住むとの記載がある。

スリクシュトラの通貨のうち広い地域に残り出土するのは、表面中央に9つの点を配したコインである (3図、中期：ベイトノウ左参照)。9つの点モチーフは、以前のコインに描かれたヒンドゥーの神を示す巻貝モチーフに代わり、8人の僧 (点) に囲まれたストゥーバ (大きな点)、さらには仏陀を示す。稲妻 (varja) と小さな巻貝を両側に置いた (Than Htunm,p.84)。また、裏面のモチーフは、二つの三角形が頂点で向き合う。この不安定が克服された後、「宇宙の力を現す蛇」が悟りに導く。第2に、表面には「太陽と月」の新しいモチーフが初めて用いられ、最高の吉兆として「太陽と月」に結びつき点や円で示される。

他の型のコインは、スリクシュトラ近郊に使用が限られたのと対照的に、このコインは、南ではヤンゴン近くのバゴーなど、北ではハリン近くのシュエボに広がり、東ではマンダレーの南のピンマナー (数キロ西に首都ネービードー) やその東でサルウィン川に近いロイコーまで、西ではアンダマン海に接したサンドウエーまで広がり、数千のコインが発掘される。新しいモチーフのコインが古代の交易者の間で受け入れられ、人びとは仏教の前進した「異なる偉大な都市」建設を目指したのである (Than Htunm,p.97)。

8世紀までにピューの首都がハリンに移ると、新たな「上る太陽」のコインが遠距離交易のために登場した。ベトナムで出会ったピュー・コインは「上る太陽」コインであり (1図(20)参照)、裏面には上下で向き合った、調和のシンボルである「2つの三角形」 (3図、中期：ベイトノウ右参照) でなく、「上る太陽 (太陽と光)」のモチーフを描く。表の面で9点モチーフや「太陽と月」は消え、裏面では、古くからのスリバッサ (srivatsa) をテントのようなモチーフで復活させ、ヴィシュヌの妻スリの寺院を示す (Moore,2007,p.34)、多産と豊富の吉兆シンボルを中央に置いた。右に卍モチーフ、左には、上下で向き合う「2つの三角形」モチーフを描いた。数千の「上る太陽」のコインがハリンと周辺から発掘され、アジア地域で広く用いられた (後述)。

スリクシュトラには遠方の外国コインが多く流入した。内陸の城市ハリンと違いスリクシュトラは外国の船や商人が容易に接近でき、海洋交易で繁栄した都市であった。

スリクシュトラでは流入したムスリム金貨や金貨の護符が発見され、近年でも数百枚の銀コインを入れた壺が発見された。状態が良く鑄造期の判明する金貨は少ないが、アラブの919年ディナール金貨に類似し、ウマイヤ朝のカリフ・コイン (685-705年) でもありうる。銀貨197枚は700～900年のものと判明する (Than Htunm,p.97)。ムスリム商人が、交易目的でムスリム・コインを活発な商業都市スリクシュトラに運んだのである。

しかし、8世紀末までにピューの中心は城市国家ハリンに移動しており (Than Htunm,p.109)、9世紀に外国コインがスリクシュトラに流入したとは考えられないけれども、繁栄期にはムスリム・コインが流入していた。その後の衰退のなかで9世紀になると、ピュー・コインは流通せず子安貝

が使用されることになった（伊東,p.120）。

「上る太陽」コインの国外への広がり

「上る太陽」コインは、東ではベトナム南部のオケオ、西でバングラデシュのクミッラ（ダッカの西、インド・バングラデシュ国境）におよぶ、広い範囲で発見される。雲南省でも1962年に多数のピュー・コインが発掘され、ハリンのこのコインであった可能性は高い。ハリン以前の「上る太陽」コインは、5～11世紀にビルマ西部で活動したウェーサリとオケオ間の交易ルートが存在を伝える（Moore,2007,p.144）。

マレー半島の南部タイでは、最初期のコイン、ベイトノウの「上る太陽」コインが発見された。数百のピュー・コインと8つの楔形に切断された多くの部分コインが、マレー半島の東岸に位置するナコーンシータマラートで70年代に出土した（Than Htunm,p.121）。近くのサイトでは5世紀からの考古学的な断片が出土した（後述、3(1)参照）。また、西岸ではタイのクラビー県ソング・トム（Thong Thom,3(2)参照）では、「巻貝」モチーフの小さな金貨（直径1釐ほど）が、多くのインド・ビーズや400年ころの交易品とともに出土した（Than Htunm,p.72）。大半が典型的なハリンの「上る太陽」コインであり、7～9世紀におけるハリンとタイ・ベトナム、インド東部との繁栄した交易を伝える。なお、タイではモン族の都市国家ドヴァーラヴァディー王国（6～11C）の類似コインが出土する（Wicks,p.116）。

この時期にオケオでも、「上る太陽」コインのうち、「上る太陽とスリバッサ」コインとその楔形部分68～70個が出土し、他にもベトナム南部でたびたび出土し、楔形部分はローカルな交換に用いられた。出土したコインには、2～4世紀の「巻貝とスリバッサ」モチーフのコイン（8.3～8.6釐）と、ハリンの「上る太陽とスリバッサ」モチーフ（9.2～9.4釐）がある（Hall,p.58）。銀の純粋さと大きさが一定のピュー・コインを取引に用いた。カンボジアでも扶南（オケオ）との関連で「上る太陽」コインが出土する（Wicks,p.116）。

ピューは、4～8世紀にガラス、瓶、綿布を輸出し、また、乾燥地に適した綿の供給地として繁栄していた（伊東,p.119）。ピュー・コインが広範なアジア地域に存在したことは、7～9世紀に、ハリン、タイ、古代インド（現バングラデシュ）の間における頻繁な交易と地域の繋がりを伝える。

2 オケオ出土のビーズとオケオの繁栄と衰退

(1) オケオのビーズと交易拠点としての繁栄

オケオは2～7世紀に、マレー半島と極東との間における、扶南の主要な停泊地であり、港市として発展した（4図参照）。東南アジアで最初の巨大なコスモポリタンな都市（450釐、スリクシュトラは1477釐、既述）であり、ベトナム南部で繁栄した（Miksic,p.20）。城壁を築き、それに沿って堀を掘削し、宗教施設に必要な煉瓦の製造に必要な労働力を有し（Higham,p.252）、多数のガラスや準貴石のビーズを製作した（後述）。

3世紀初めころに扶南は、(イ)水路網を建設し海岸をメコン川上流に結びつけ農業システムの高い生産性を確立し、(ロ)クラ地峡（Isthmus of Kra）経由交易における戦略的位置の有利さを享受し発展した（Hall,p.48）。

オケオは、単独で存立したわけではなく、扶南王国の首都でも主要な港でもなかった（Miksic,p.4）。オケオは、内陸に首都をもつ大きな政治単位の一部であった。今日、海岸から25キロに位置し、1500年間に海岸線は変化したけれども、以前も船が最初に訪れる港ではなかった。80キロ先のアンコール・ボレイ（現カンボジア領）が一つの首都であり、その北東のパ・ブノンが別の首都であって、オケオは重要な交易センターであった。

オケオ遺跡は、今日、ベトナム南部ロンズエン近くに位置し、レンガや石で作られた水路や建造物址が残る（4図③④参照）。ロンズエンのアンジャン省博物館（4図②参照）は、オケオ出土品の一部として水晶製の大きなリングを展示し、カーネリアンの連、半透明な玉の3連、他に乳白色の蜜柑玉の連も所蔵する（Miksic,p.2）。また、ロンアン省博物館（ホーチミン・シティの西方で近い）は、青のクリア・ガラス製の耳飾りや腕輪を所蔵する（Vo Si Khai,p.71）。

ホーチミンの歴史博物館は、オケオのビーズ類を一区画に展示する。外国人入り口から入るときには撮影禁止である。1940年代にオケオの発掘が始まり、出土した1万ほどの遺物が収蔵され、このうちガラスや準貴石のビーズは数千である（Miksic,p.20）。なお、ベトナム中部のクアンナム省で、サフィン文化圏に含まれるライ・ニギ（Lai Nghi）・サイトでは、63の墓から1万近くのビーズが2002～4年に出土し、このうちガラス・ビーズは8643個、金ビーズが104個であっ

た (Tingley,p.46)。

ホーチミンの歴史博物館は、興味深いオケオのビーズを展示する。

(イ) 金の耳飾りや指輪、金ビーズなどが30ほどと、鑄造のための鑄型が展示される (Tingley,p.139)。(ロ) 水晶、メノウ、カーネリアン製の印章2つ、亀の象など10点ほどが展示され、ミャンマーで出会った亀や印章と類似する。(ハ) 水晶、カーネリアンのビーズの首飾り10連が展示され、(ニ) 単色のインド・パシフィック・ビーズの、赤茶、緑、黄色の3連や、10粒強の青のクリアを含む連がある。(ホ) ローマンの双子、メノウ、赤い壺型(襟付き)のインド・パシフィック(4図⑤左上1237参照)とともに、地が赤でアイが空色、白の放射のアイ・ビーズや、緑の地に黄の「アイと放射」モチーフのササン・ビーズ(同1241右)、また、薄い青の地に白のアイと放射、それに流線モチーフが二段になったササンも展示される(Manguin,p.290)。オケオにアイ・ビーズやササン・ビーズが流入していた。2段モチーフはヤンゴンで出会ったササン・ビーズに似る(1図③)。

(2) 生産拠点オケオと国際交易

港市オケオでは、ビーズが流入するだけでなく、先進地域インドから流入したインド・パシフィック・ビーズ(以下、インド・パシフィックと略)が2～7世紀ころに製作された(Ramli et al,p.28)。ここで製作したインド・パシフィックの組成(11例)はソーダ灰ガラスであり、ソーダ(Na_2O)比率(単純平均)は22.77%、酸化アルミニウム(Al_2O_3)は7.13%であり、高アルミナガラスである(組成と分類については、加納,2013参照)。また、マレー半島中北部の港湾市スンガイ・マスでは7～12世紀にインド・パシフィックを製作し、ここでの製作ビーズの組成(22例)はそれぞれ16.56%、9.86%であった。いずれも南インドのアリカメドゥで製作されたビーズの酸化アルミニウム組成を超え(Ramli et al,p.25)、2つの港湾市で生産され土着化したインド・パシフィックであった。

オケオは、インドで発展した技術を取り入れ、ビーズを現地で製作した。ガラスと石、未加工ガラスや、原料ガラスを再融解させる「るつぼ」も出土した。オケオのビーズ製作者は、石や原料ガラスを扶南の広範囲な経済ネットワークを通じて入手し加工した。多くの残滓は、輸入した原料を製作に用いた結果であり、製品を輸出したのであ

ろう。

オケオで発掘されるローマン・ビーズは、インド経由でアジアの交易者によって持ち込まれた。同時に、金トンボもローマン・ビーズも製作された(Francis,pp.92-93)。ただし、ルビー、サファイアなど宝石は、インドから完成品が輸入された。50個以上の印章とカメオ数個が出土し、印章のいくつかはオケオで彫刻されたけれども、形式から地中海地域出自と判定できる5個を含め、大半は完成品が輸入された。

オケオは、東南アジアにおける最初の商業センターであった。住民は密に居住し、輸入原料を用いる専門化した多くの手工業職人がいた。陶工、ガラス労働者、金打ち屋、宝石商、彫刻者、青銅・鉄・スズの職人などである。オケオの金細工人は多くを製作した。オケオでマルレ(Malleret,L.)が発掘した金細工品は、918個の金ビーズを含む1312個の金装飾品であり、重さは1200グラム以上であった(Miksic,p.18)。また、60枚の銀細工は、おもに銀貨の形で出土した。砂金はカンボジアに存在するけれどもベトナムにはない。オケオで用いる金は、フィリピンやボルネオなどから輸入していた(Miksic,pp.19-20)。

しかし、活動的な港市オケオは、600～650年ころに衰退し消えた。5世紀になると航海技術が進み、扶南に深刻な影響を与えた。インドからの船はマレー半島のクラ地峡における積み替えを避け、マラッカ海峡を経て扶南を通過し直接に中国と交易した(Hall,p.60)。扶南はインド・中国間交易から切り離された。扶南は歳入を農業に求め、5～6世紀には灌漑施設を革新し農業的な生活様式に移行した。扶南の崩壊を阻止できなかった。

5世紀末までに扶南は北の林邑によって土地を奪われ、扶南船団の船員は海賊となった(Hall,p.60)。マレー半島で従属していたパンパン港市(4図参照)は、使節を中国宮廷に派遣し独立を宣言した。5世紀半ばまでに扶南は主要な国際交易センターでなくなり、海で活動する住民は繁栄する林邑に移動した。6世紀半ばにクメール人が北で勢力を増すと、農民も新しいクメールの中心地域(トンレ・サーブ湖の南東コンポントム地域)に向かった。7世紀に扶南は消え、メコンデルタの灌漑水路はジャングルに戻ったのである。

扶南が消えた後、タイ中部のロップリー(5図参照)が重要な商業センターになり、7世紀末ま

でビルマの流入コインが、ローカル・コインとともに用いられた。

3 マレー半島に流入しローカルに製作されたビーズと東西交易

(1) 東西交易とマレー半島の西と東

東と西を繋ぐ交易は、キャラバン交易路の分断により、2～3世紀には海洋交易に向かった。中東と中国の海洋交易は、中東・インド間、ベンガル湾・マレー半島のクラ地峡間、クラ地峡の陸路による西海岸・東海岸の間、東海岸・タイ湾・扶南のオケオ間、そしてオケオ・中国南部間を順に繋ぐ形をとった (Hall, p.31)。2～3世紀にクラ地峡は、海路と陸路を繋ぐ交易の要であり停泊点として特権的な地位を有した。

西の人々が1世紀にインドに到着したとき、インドとマラッカ海峡地域の間で確立されていた海洋交易路を発見した (Hall, pp.37-38)。交易の要としてクラ地峡もオケオも繁栄した。航海技術が改善されマラッカ海峡・南シナ海の直接的な海洋交易路が6～7世紀に成立するまで、繁栄は続いた。その後、とくに11世紀以降、マレー半島のクラ地峡は、東西交易の停泊点としての重要性を低下させた。しかし、スリランカ・ビルマ・クメールを繋ぐ二次的な交易における重要性は保った (Jack-Helgoualc'h, p.223, 以下 Jack-Hel と略)。

インドの商人は、すでに2～3世紀にはベンガル湾を横断する交易を支配し、東南アジアとの最初の接点をクラ地峡の商業居住地に築いていた。また、北部インドから陸路でアッサム地方、マニプール (インド・ミャンマー国境近く)、東ベンガルの山地から東に向かい、中部ビルマの肥沃な平原との交易も進めていた (Curtin, p.101) (2図参照)。

マレー半島を越える陸路には11の主要なルートが存在し (Cayron, p.61)、ビーズもこのルートで移動したといえよう。クラ地峡が東西交易の要であった紀元前後～5、6世紀まで、また、7世紀から11世紀、さらに14世紀ころまで、川や山の道を辿る内陸ルートが、マレー半島の東と西を、活発に、あるいは、ひっそりと結びつけてきた。当時の交易は、おもに陶器・貴石やガラス製ビーズ・金製品を運び、交易路の停泊地でそれらの残滓がたびたび出土する。交易ルートと残滓を確認することで、西のローマンやササン・ビーズなど

の流入路も想定でき、また、流入ビーズに伴うビーズ製作の土着化も判明する。同時に、ホーチミンで出会ったビュー・コイン (1図②参照) の移動経路も、ある程度、推測できる。

11の主要なルートは、2つがビルマからタイ湾に至り、5つがクラ地峡に広がり、4つがマレー半島南部に広がる (5図参照)。半島南部に広がる4つのルートは、第1に、ケラントン・マラッカ・ルートで、パナリカンを経て南シナ海岸とマラッカを結ぶ (南①)。第2に、パハン・マラッカ・ルートで、パハン川とパナリカン (Panarikann) を経て東西の海岸を結ぶ (南②、途中から南①の可能性)。第3に、パハン・ベルナム・ルートで、ベルナム川を経てクアラ・ルンプールの北西、ベルナムに至る (南④)。第4に、セムブロン (Sembrong) ルートで、セムブロン川を経てムアル (Muar) に至る (南③)。しかし、東西交易の要衝は、半島南部よりも中北部のルートであった。

マレー半島の西と東を繋ぐ陸路ルート

ビルマからの交易ルートのうち、第1のルートは、アンダマン海側のタポイから、あるいは、北のモーラミヤインから、スリー・パゴダ峠を経て、タイ湾のラチャブリ (バンコク県の西隣) に至る (北①)。16～17世紀ビルマ軍がシアム (タイ) 侵入時に用いた (Jack-Hel, p.33)。第2のルートは、テナセリム (Tenasserim) 川ルート (北②) で、ベンガル湾のメルギー (Mergui) からタイ湾のクイブuri (Kuiburi) に至る。1662年にフランス使節団が中国に向かったとき用いたルートである。

クラ地峡を越えるルートのうち、第1のルートは、西のラノーン (Ranong) から、東のチュムポン (Chumphon) に至る (K①)。東のカオ・サム・ケオ・サイト (交易拠点②、後述) は、紀元直後に遡る (Jack-Hel, p.44)。

第2のルートはタクアパ・ルートで、西のタクアパ (Takua Pa) からタクアパ川を上り、東側でタピ川 (Tapi) と合流しバンドン湾に至る (K②)。

西のタクアパはローカルな陶器片の他に、中国や中東の陶器片、ビーズ、中東のガラス片を出土し、これら陶器片は東のラエム・ポー (Laem Pho) の出土品と同じで、ともに重要なサイトである。このルートは、陶器だけでなく上納する金・スズの運搬にも用いられた。

第3のルートは、西のクラビー近くから東でバンドン湾やその南のナコーンシータマラートに至

る (K③)。距離半分と短く実用的で、タピ川も移動を容易にした。

西でクラビーに近いサイト、フアン・ルク・パット (Khuan Luk Pat) は、紀元直後の考古学遺物を出土し、また、準貴石の印章やビーズやビーズを製作した。出土品は、ビュー・コインも含めて (既述)、オケオの出土品と同じで両者の結びつきを示す。ウィアングサ (Wiang Sa) サイトはルートの中央にあり、王冠をつけた6世紀ころのヴィシュヌ石像も出土する (Jack-Hel,p.46)。農業を基盤にインド化した古代サイトの1つであった (後述)。西のナコーンシータマラート近くのサイトも、5世紀からの考古学的な断片を出土し、ウィアングサの出土品と同じである。

第4のルートは、トラン (Trang) からナコーンシータマラートに至る (K④)。8世紀以降に奉納された大乘仏教の刻板が通行困難な洞窟にあり、このルートは地元や宗教で用いられた。

第5のルートは、ケダーとランカスカ (Langkasuka、今日のYarang-Pattani) を結ぶケダー・パタニルートである (K⑤)。西でスンガイ・ムダ川を出て分流に接続し、ヤラ (Yala) ・サイト近くを経てヤラング (Yarang) に至る。19世紀末にも利用された。陸路は困難でパナリ川の流れは常に不規則であった。ヤラングでは、5世紀ころのサン朝の金貨が出土した (Muksic,p.27)。

第5ルートの古い代替ルートは、ムダ川の北のメルボック (Merbok) 川を上り、北側からヤラングへ急激に下る (K⑤')。このルートは、陶器や青銅器を出土し、西のケダーは5世紀に、東のヤラングは6世紀にインド化が生じた。ムダ川とメルボック川の間にあるカンボン・スンガイ・マス (後述3 (3) 参照) は、9世紀の繁栄した港市であり、タクアバ (後述②) とその近くの諸島ココ・カオ (Ko Kho Khao) と同じ時期に活動した。

ケダーで後に第二の港となったカンボン・ベンダラン・ブジャン (K. Pengkalan Bujang) (6図参照) は、12～13世紀に活発な国際交易を行った。宋や元の陶器の片が出土し、東海岸で10～14世紀に活動したサティングブラ (現ソンクラー) と交易を行い、そこで製作されたローカルな陶器が出土する。

(2) 交易拠点とローカルに製作されたビーズ

主要な交易地点は、遺物を残し、ときには製作も行った (各サイトの所在地は6図参照)。

① バン・ドン・タ・ベット (Ban Don Ta Phet) : このサイト (S①) は、ほぼ350～400年ころに属し、タイ中西部カンチャンブリ県にある。海港でなかったけれども、スリー・パゴダ峠ルートやチャオプラヤー川経由で海洋交易と接続していた (Manguin,p.283)。

このサイトは、青銅容器300点とは別に (Jack-Hel,p.81)、ガラス製や石 (アゲート、カーネリアン、水晶、ネフライト) 製のビーズやカーネリアン製のライオン形ペンダントを出土した。ライオン型ペンダントは輸入された。製作の証拠がなく、インドの製法が見られるためである (Gover,1991,p.121)。また、出土した3000個のビーズのうち、500個以上が準貴石ビーズで他はガラス・ビーズであった。インドで製作されたビーズ (ガラスや準貴石製) は、前4世紀から東南アジアへの主要な交易品であった。逆に、スズを多く含む青銅容器は、スズの無いインドでは高価であり、インドに流出した (Muksic,p.27)。

幾何学模様線のエッチド・カーネリアン50個以上も出土し (1図補①参照)、インド起源と推定される (Hamanshu,p.229)。インドのエッチド・ビーズは、ハラッパ文明後、前300～後200年ころの仏教文化のなかで復興し、出土品はこの時期のモノである (Glover,1991,p.122)。

②カオ・サム・ケオ (Khao Sam Keo) : このサイト (S②) は、東海岸チュムポーン近くに位置し、紀元前4世紀～後1世紀にアンダマン海・タイ湾を繋ぐルートの生産拠点であった (Murillo-Barroso,p.1762)。ビーズ、石の道具、ローカルな陶器、青銅器 (銅鼓や像など)、鉄器、金や準貴重な石の腕輪が出土した。準貴石やガラス、その未切断の断片、多数のビーズ、印章なども出土した。紀元前2世紀～紀元ころに活動し、タイのフアン・ルク・パット・サイト (後述) の初期段階の活動に似る (Manguin,p.286)。

③フアン・ルク・パット (Khuan Luk Pat) : このサイト (S③) は、タイのクラビー県ソングトム (Thong Thom) の町に位置し、以前は、河口のはるか端にあった。タイで「ビーズの岡」と称され、500年ころまで (Jack-Hel,p.84)、1～6世紀に活動した (Cayron,p.14)。ローマのミルフィオリ・モザイク・ビーズと同じ製法による「人面」ビーズ (Jack-Hel,p.88) やアリカメドゥの「襟付きガラス・ビーズ」 (Muksic,p.27) の他、様々な小さなモノを多く出土する。「襟付きガラス・ビー

ズ」は、4 図⑤ 1237 の赤い壺型とも考えられる。5～6 世紀の文字がカーネリアンの印章に刻まれ、オケオ出土の印章の文字と同じである。1～2 世紀のローマ印章、ガラス容器やインド・コインがベンガル湾を越えて流入し遠距離交易を裏づける (Manguin,p.286)。また、ビルマ南部のパゴの「巻貝・スリバッサ」モチーフの薄い金貨 (3 図、初期:パゴ参照) が数百枚出土した (Muksic,p.27)。金箔でできた 0.5^g のコインである。

このサイトは、商人だけでなく職人も流入し、ガラス・スズ・準貴石の先進技術を有し生産の中心であった (Muksic,p.28)。ガラス原料を輸入し、また、ガラス製作に適した砂が豊富にあり、大量な原料魁も出土し、未完成の石ビーズや大きな原料片 (10x13^{mm}) があつた。スズの少ないインドには鋳造スズを輸出した。

④クアラ・セリングシン (Kuala Selingsin) : このサイト (S④) は、マングローブの沼に侵食され、6 世紀のモノとされるカーネリアンの印章が出土した。6～11 世紀に活動し、また、放射炭素年代測定では前 3 世紀～8 世紀に活動したとされる (Cayron,p.15)。1930 年ころの調査によると、サイトの最上層では数千のガラス・ビーズが発見された (Jack-Hel,p.91)。ビーズの大半は単色で、いくつか洗練されたビーズも含まれた。金トンボや多色のビーズなどである。未研磨のビーズや原料のアゲートなど塊が存在し、輸入されたことを示す。

このサイトは、タミール人の職人コミュニティが生産を担い、6～10 世紀にファン・ルク・パット (S③) の後継サイトであった。未切断の黒青色の石は、ローカルなビーズ製作の可能性を高める。スズや鉄の鋳造は知っていたけれども、石器を使い陶器を作った (Manguin,p.286)。人々は土着的な信仰を捨てず、10 世紀ころまで伝統的な埋葬を続けた。近隣のスンガイ・マスやスンガイ・ブジャンの住民 (後述) が、4～5 世紀からインド化したことと対照的である。

⑤タクアパ: このサイト (S⑤) は、暗い半透明な青や緑のガラスの胎に青いアイをもち白い点を配したアイ・ビーズをかなり出土した (Jack-Hel,p.291)。青の地に細い白の線でアイを 10 個ほど描き、アイはクリアなガラスが盛り上がっている (Francis, plate 23-26)。通常のアイ・ビーズと雰囲気が異なり、このサイトで製作された可能性が高い。このサイトは、クラ地峡における西の

拠点やビーズ製作の拠点として、9 世紀の数十年に限られた時期に活動し、その後急激に衰退した (ケダーの項参照)。類似のビーズはスリランカのマントイで発見され、また、スンガイ・マスやラエム・ポー (チャイヤ) では地表上層から、ローカル製作のためかほぼ壊れた状態で出土する (Francis,p.97)。タクアパでは、スンガイ・マスで発見されたモザイク・アイ・ビーズの断片も多く出土する。

(3) カンボン・スンガイ・マスのビーズー交易拠点の切り替えと継続した製作

カンボン・スンガイ・マスは 9 世紀に繁栄した交易地点であり (既述)、ケダーとランカスカを結ぶルートに沿い、ムダ川とメルボック川の間に位置する (6 図参照)。今日、ここには民家が建ち港湾の面影はない (6 図①参照)。車で 4～5 分先のムダ川河口 (④) には、レンガの基礎を残す小さな遺跡が保存され (③)、隣には 1821 年タイと戦ったスルタンの名を記した門だけが残る (②)。水路で分断された地を遠回りして着くカンボン・ペンダカラン・ブジャンの博物館 (⑤) は、12～13 世紀の活発な国際交易に伴う出土品を展示する。

現地博物館に展示される陶器 (9～13C、宋) やガラス容器片は別にして、ビーズ類では、(イ) 薄くした丸型の金ビーズ (メルボック川の地区で発見)、金の指輪や耳飾り 4 点がある。(ロ) 黄、茶、緑など単色のインド・パシフィック・ビーズが、それぞれ 15 ほどまとめられ 6～7 連が展示され、インドの交易の証との説明がある。また、赤、黄、緑を繋いだ連もある。スンガイ・マス出土のビーズは、18 の小箱に集めて展示する。(イ) 4 箱がインド・パシフィックで、(ロ) 水晶が 1 つ、(ハ) クリアな青、緑の双円錐形、(ニ) 青のクリア小玉で、色はミャンマーの青に類似しクリアとは相違する。(ホ) ローマン・ビーズが 3 箱あり、金トンボで 3 つ子や 2 つ子の連結、黒で石製の類似のモノ、それに黒の小玉が 20 粒強あり、白の縦線が入る。ミャンマーで見た縦線モチーフのモノに類似する。(ヘ) 赤、黄など多色の紡錘形と丸形 2 つのササン・ビーズ、また、黒の地に白の線の二重円紋とアイを描いた、やや角ばった珍しいアイ・ビーズの断片である。

これらのローマンもササン・ビーズも、スンガイ・マスの出土という点を考慮しなければ、とくに珍

しくはない。博物館の説明文では、緑のガラス断片は西アジアから11～13世紀に、アラブ人やペルシア人によってブジャン溪谷に持ち込まれた。

スンガイ・マスで出土した青の地に太い白の輪と小さなアイのビーズは、この地の製作と見なされる（Francis, plate 23-26）。スケッチ図が示すように、角ばった地に角ばったアイを配置し、通常のアイ・ビーズとは雰囲気異なる（6図⑥、1図補③参照）。博物館に展示される珍しいアイ・ビーズの断片に類似する。緑や白のモザイクの地に、赤の輪と黄のアイを配したササン・ビーズも出土した（1図補②参照）。これも黄のアイが角ばり通常のササン・ビーズと異なり、これらは素朴な土着化ビーズと言えよう。

カンボン・スンガイ・マスは、スンガイ・ムダ扇状地水路の一部であり、スンガイ・メルボックの河口に位置する（6図参照）。9世紀末までに海岸線が堆積されたが、いくつかの商業活動は続けられた。こうした結果、スンガイ・マスの村々では、輸入陶器の片（中東と中国）、さまざまな色の中東ガラス片群、ビーズが発見され、交易港としての役割が確認された。壺の破片は最も多く85%（81年調査）を占めた（Jack-Hel,p.296）。

表面採取されたガラス片は中東のものであり、既述のラエム・ポーヤコ・コ・カオの出土片に類似する。ガラス、宝石、骨、金数千のビーズが新たに出土した。帽子飾り付き、円柱型、ピラミット型、多面型などのビーズであり、主要な色は、赤、青、緑、黒、黄色である。幾つかアイ・ビーズもある（Jack-Hel,p.298）。

未完成のビーズやガラス・ビーズ製作の原料が出土し、マレー半島の西海岸に沿った③ファン・ルク・パット（S③, 1～6C）やクアラ・セリングシン（S④, 6～11C）の後継と、スンガイ・マス（7～15C）を見ている。このサイトはインド・パシフィックを製作し、同時に、金トンボに見られる双子などの分節化ビーズ、イスラムの折り込みビーズ、モザイク・アイ・ビーズを製作した。これらビーズは、イスラム西方、東地中海周辺で製作された。

モザイク・ビーズは、モザイク・ガラスで外国の技術によってローカルに作られた。多いのは大きめ（2^号ほど）で、青の地にアイの青を透明な白の輪で囲み、博物館の展示ビーズと同形である。もう1つは、小さく（1^号）不透明な赤の輪で黄のアイをもち、周りを不透明な白や緑で飾る。土

着の多色ササン・ビーズの一種である。タクアパで製作、発見されたタクアパ・ビーズも、青の地に、封透明な白の輪で中央にアイの青をもつ。アイは、スンガイ・マスのアイより大きく盛り上がっている（6図⑥, Francis, plate24 参照）。

クラ地峡の陸上交易が停滞し、11世紀半ばにビルマの王はクラ地峡を越え、タクアパを襲撃した。交易都市タクアパは衰退し、マラッカ海峡を進む交易路はケダーに移動した。ケダーは、11世紀に中国とインドを結ぶ海洋交易路に位置し、スマトラ島のパレンバンやシュリーヴィジャヤからマラッカ海峡を通る船が停泊し、ベンガル湾を横断できる北の風を待った。水を求める外国商人が、製品を交換した交易に依拠した（Jack-Hel,p.193）。11世紀後半以降、ケダーの考古学的出土品は増加した（Hall,p.219）。

南部ケダー（7～15C）で出土する大半のビーズは8世紀以降のもので、インド化の最初期に該当する（Jack-Hel,p.203）。スンガイ・マスでは数千個が出土し、かなりの部分をカンボン・ペンダラン・ブジャン（Kampong Pengkalan Bujang）が占める。1961年の発掘では、4525個のガラス・ビーズが出土し、少数のテラコッタ、準貴石のビーズ、アゲート、水晶、カーネリアンも出土した。最も多いビーズは、小さな単色のインド・パシフィックで、32.5%が不透明な赤、30%が不透明や透明の青などであった。メロン型など珍しいビーズは少なく、多色ビーズは1%に過ぎなかった（Jack-Hel,p.484）。

ケダーでは、ビーズが中東から輸入された原料製品を用いてローカルに製作された。しかし、12～13世紀におけるケダーは交易都市として繁栄し、搬入品を輸出するだけでなく、ローカルな需要が存在した。最も洗練されたビーズは、インドや中東から流入していた（Jack-Hel,p.485）。

おわりに

スリクシュトラで出会ったグローバル・ビーズは、はじめに述べたように、二つが連結した双子などの金トンボ（1図①参照）や縦縞モチーフのローマン小玉（1図②前列）、また、赤と黄など多色のササン・アイ（1図②中央）であり、古都スリクシュトラで出土したとも言われ、比較的早い時期に流入し集積された可能性もある。また、ヤンゴンで出会った多色のササン・ビーズを多く

繋いだ連でも、ローマン・モザイクやプトレマイオス期のビーズを含み、とくに他ではほとんど見ない、アイと放射モチーフの上下2段モチーフ・ビーズがある。2段モチーフに類似のササンは、ホーチミン歴史博物館でオケオ出土と記されて展示されている(2(1)参照)。

これらグローバル・ビーズの流入経路は、もちろん明らかでない。しかし、スリクシュトラで出会ったグローバル・ビーズは、イラワジ川・アンダマン海を結んだピューの交易ネットワークの存在のゆえに、豊かなスリクシュトラに流入したとの想定も、また、ヤンゴンで出会ったササン・ビーズの連は、ベンガル湾・アンダマン海に近いモラミヤインで出土したとの説明も、グローバル・ビーズ流入の型としては成立するといえよう。スリクシュトラには多くの外国コインが流入し、700～900年ころのイスラム銀貨も流入しており(1(3)参照)、こうしたなかでグローバル・ビーズも流入していたと十分に考えられる。

当時、ピューを起点にアジア地域に広がる交易ネットワークが形成されていた。港市として繁栄したオケオに、ピュー・ビーズではなかったけれども、特徴的なモチーフのピュー・コインが「集積」され、今日、出土することが一つの根拠となる。しかも、オケオで出土するだけでなく、いくつかのベトナムのサイトでも、また、タイ西南部のサイトでも出土する。タイでの出土は、マレー半島のクラ地峡を越えるタイのルート(K①～K③ルート)沿いのサイト(ソング・トムやフアン・ルク・パット(S③)、およびナコーンシータマラート)で出土する。ピュー・コイン出土のサイトは、ピュー・オケオ間に広がった交易ネットワークを確認させ、さらに言えば、ピューの地域的広がりを具体的な形で伝える。また、5～11世紀にビルマ西部で活動したウェーサリとオケオの交易ルートも存在した(1(3)参照)。

ピュー・オケオ・ネットワークは、ピュー・コインの出土サイトが示すように、東西交易のネットワーク、すなわち、インドなどの西から東への交易がクラ地峡と出会い、クラ地峡を越えて半島の東側に向かい、オケオ、そして中国南部に伸びる交易ネットワークに合流し、そのなかでピューの地域的広がりが成立していた。

グローバルな東西交易ネットワークへの合流と接触は、航海技術の革新が実現するまで、港市オケオに繁栄を確立し、ビーズに限定して考えれば、

グローバル・ビーズであるローマン、ササン・ビーズ、そして多くのインド・パシフィック・ビーズをオケオに「集積」させた。同時に、これらグローバル・ビーズに触発されて、グローバル・ビーズの現地製作による土着化グローバル・ビーズを出現させた。マレー半島において東西交易の重要な港市では、一定の条件をもつサイトで同様な土着化グローバル・ビーズが製作された。

しかし、航海技術が改善されると、これらの港市は東西交易ルートから切り離され衰退を強いられて消えていき(オケオ)、あるいは、交易路も地元や宗教に用途が限られ、ローカルな港として存続するに留まり、土着化ビーズの製作サイトも活動を停止した(3(2)参照)。活動を停止するなかで、マレー半島において12世紀ころまで土着化ビーズを製作したサイトは、ケダー周辺のスンガイ・マスであった。クラ地峡の陸路ルートに代わった海洋ルートの時代になっても、地理的にも半島西に位置する港市として、また、勢力を強めたシュリーヴィジャヤとの結びつきによって活動を維持でき、比較の後まで土着化ビーズを製作し、また、西方のビーズを流入させた。

ピューで出会ったグローバル・ビーズは、東西交易ルートにアンダマン海で接続しビルマ中部に流入し、同時に、ピューとオケオを繋ぐ陸のルート(北①②)も補助的に流入に関わった。他方、独特なモチーフで精緻な、そして、アジア古代ガラスのもつ青の独特な色合いのローカル・ビーズが多数製作された。緑のガラス製や準貴石製の精緻な象モチーフや、独特な色合いの緑青色の大きな「輪」などが、スリクシュトラやサモン渓谷をはじめ多くのサイトで出土した。ローカル・ビーズが多数製作されたことの証である。これらピュー・ガラス製品も一部は輸出されたけれども、ほとんどはローカルに「集積」された。オケオなどに広がりを有したピュー・コインも、ハリンなどローカルなサイトで出土する。ピューの地域的広がりが、ピューのビーズやコインを軸にローカルな場で実現した。バングラデシュやインドからの西の陸ルートも、ローカルな移動に関わったのであろう。

ピュー・コインのリージョナルな広がりとはピュー・ビーズのローカルな深まりは、ピュー文化の輝きを、グローバル時代のツーリストに伝えてくれる。特徴的なモチーフをもつ「優れた文化的なモノ」の広がりが、グローバル・リージョナ

ル・ローカルな関係のなかで発生・展開・変容したのかは、特定のモチーフに注目することによって、具体的な形で理解可能となるといえよう。

引用文献

- Aung Thaw, 1968, *Report on the Excavations at Beikthano*, Ministry of Union Culture, Revolutionary Government of the Union of Burma, 1968, Rangoon, p.220.
- Cayron, J.G., 2006, *Stringing the Past: An Archaeological Understanding of Early Southeast Asian Glass Bead Trade*, The University of the Philippines Press, p.91.
- Cole, B.C., 2003, "Ancient Hand Stone Beads and Seals of Myanmar", in eds. Glover, I.C. et al, *Ornaments from the Past: Bead Studies after Beck*, The Bead Study Trust, London, pp.118-133.
- Curtin, P.D., 1984, *Cross-Cultural Trade in World History*, Cambridge University Press, Cambridge, p.293.
- Francis, P. Jr., 2002, *Asia's Maritime Bead Trade: 300B.C. to The Present*, University of Hawaii Press, p.305.
- 伊東利勝, 1999, 「イラワジ川の世界」, 石井米雄・桜井由躬雄, 『東南アジア史 I 大陸部』, 山川書店 111-132 頁
- Glover, I.C. and B. Bellina, 2003, "Alkaline Etched Beads in South East Asia", in eds. Glover, I.C. et al, pp.92-107.
- Glover, I.C., 1991, "Beads and Bronzes: Archaeological Indicators of Trade between Thailand and the Early Buddhist Civilizations of Northern India", in ed. K.R. Haellquist, *Asian Trade Routes: Continental and Maritime*, Scandinavian Institute of Asian Studies, Routledge, London, pp.117-141.
- Gutman, P. and B. Hudson, 2004, "The Archaeology of Burma(Myanmar) from the Neolithic to Pagan", in eds., Glover, I. and P. Bellwood, *Southeast Asia from Prehistory to History*, Routledge Curzon, London, pp.149-176.
- Hall, K.R., 2011, *A History of Early Southeast Asia: Maritime Trade and Social Development, 100-1500*, Rowman & Littlefield Publishers, Inc., Lanham, p.384.
- Higham, G., 1989, *The Archaeology of Mainland Southeast Asia: From 10,000B.C. to the Fall of Angkor*, Cambridge University Press, Cambridge, p.387.
- Jacq-Hergoualc'h, M., 2002, (transl. V. Hobson), *The Malay Peninsula: Crossroads of the Maritime Silk Road (100BC-1300AD)*, Brill, Leiden, p.583.
- 加納弘勝, 2011, 『世界のビーズ・地域の織物一人びとの願いとアイデンティティ』, 文化書房博文社, 219 頁
- , 2013, 「アイヌ玉と琉球玉 - 「蓄積」と「沈潜」, 『国際関係研究所報』, 津田塾大学, 23-32 頁
- Luce, G.H., 1985, *Phases of Pre-Pagan Burma: Languages and History*, Vol.1.2, Oxford University Press, Oxford, p.185, p.138+plates 100.
- Manguin, P., 2004, "The Archaeology of Early Maritime Polities of Southeast Asia", in eds., Glover, I.C., and P. Bellwood, pp.282-313.
- Miksic, J.N., 2003, "Introduction: The Beginning of Trade in Ancient Southeast Asia: The Role of Oc Eo and the Lower Mekong River", in ed. J.C.M. Khoo, *Art & Archaeology of Funan: Pre-Khmer Kingdom of the Lower Mekong Valley*, Orchid Press, Bangkok, pp.2-33.
- Middleton, S.E.H., 2005, *Intaglios, Cameos, Rings and Related Objects from Burma and Java: The White Collection and a Further Small Private Collection*, Archaeopress, Oxford, p.204.
- Moore, E.H., 2004, "Interpreting Pyu Material Culture: Royal Chronologies and Finger-marked Bricks", *Myanmar Historical Research Journal*, No(13), June 2004, pp.1-57.
- , 2007, *Early Landscapes of Myanmar*, River Books Co.Ltd, Bangkok, p.271.
- , 2010, "Myanmar Bronzes and The Dien Cultures of Funan", *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association*, 30, pp.122-132.
- Moore, E.H. & U.W. Maung, 2006, "Change in the Landscape of First Millenium AD Myanmar", *SOAS Bulletin of Burma Research*, SBBR4.2 (Autumn 2006), pp.2-26.
- Ramli, Z. et al, 2012, "Sungai Mas and OC-EO Glass Beads: A Comparative Study", *Journal of Social Sciences* 8(1), pp.22-28.
- Murillo-Barroso et al, 2010, "Khao Sam Kaeo-An Archaeometallurgical Crossroads for Trans-Asiatic Technological Traditions", *Journal of Archaeological Science* 37, Journal Homepage, pp.1761-1772.
- Ray, H.P., 2003, *The Archaeology of Seafaring in Ancient South Asia*, Cambridge University Press, Cambridge, p.335.
- Richter, A., 2000, *The Jewelry of Southeast Asia*, Thames & Hudson, London, p.304
- Than Htun (Dedaye), 2007, *Auspicious Symbols and Ancient Coins of Myanmar*, AVAHOUSE Sdn Bhd, Malaysia, p.222.
- Tingley, N., 2009, *Arts of Ancient Viet Nam, From River Plain to Open Sea*, Asia Society, The Museum of Fine Arts, Houston, p.356.
- Tomber, R., 2008, *Indo-Roman Trade from Pots to Peppers*, Dutchworth, p.216.
- O'Reilly, D.J.W., 2007, *Early Civilizations of Southeast Asia*, Altamira Press, Lanham, p.238.
- Vo Si Khai, 2003, "The Kingdom of Fu Nan and the Culture of Oc Eo" in ed. Khoo, J.C.M., Orchid Press, Bangkok, pp.35-86.
- Wicks, R.S., 1992, *Money, Markets, and Trade in Early Southeast Asia; The Development of Indigenous Monetary Systems to AD 1400*, Cornell Southeast Asia Program Publications, Ithaca, p.354.

第1図 ピュー・ビーズ スリクシュトラと
ヤンゴンで出会ったビーズ



②ローマン（下玉3つ）とササン（下アイ、上右2つ、大17ミリ）



①ローマン、金トロンボ（1-4C、大W11ミリ）

④サイコロ（左直方体H14ミリ）



③モザイクと貴重なササンの連（L43釐）

⑥カーネリアンのトラ・ビーズ子をくわえたトラ印章（W18ミリ）、⑦トラ3つ（中央W20ミリ）



⑧ガラスの（腕）輪（BC3-AD1、H146ミリ）

⑨空色の（腕）輪（径65ミリ）と平玉



⑤ガラスのディスク（H29ミリ）



⑩象のビーズ（石とガラス製、下緑W18ミリと上

⑪象のビーズ（上左W34ミリ）と鳥（最下段右）



⑦蜜柑玉（W20ミリ）、ゲーム・ピースなど

⑬長管（H93ミリ）の首飾りと特異なアイ（W23ミリ）と部分（⑬'）



⑫ガラスの護符（右下蛙？H14ミリ、左下パゴダ？）



⑭ガラスの護符 釣鐘型（上中央2つ、葡萄型H20ミリ）



⑮面取りガラスの霰玉 牙のような黒の護符（石製、右端H40ミリ）

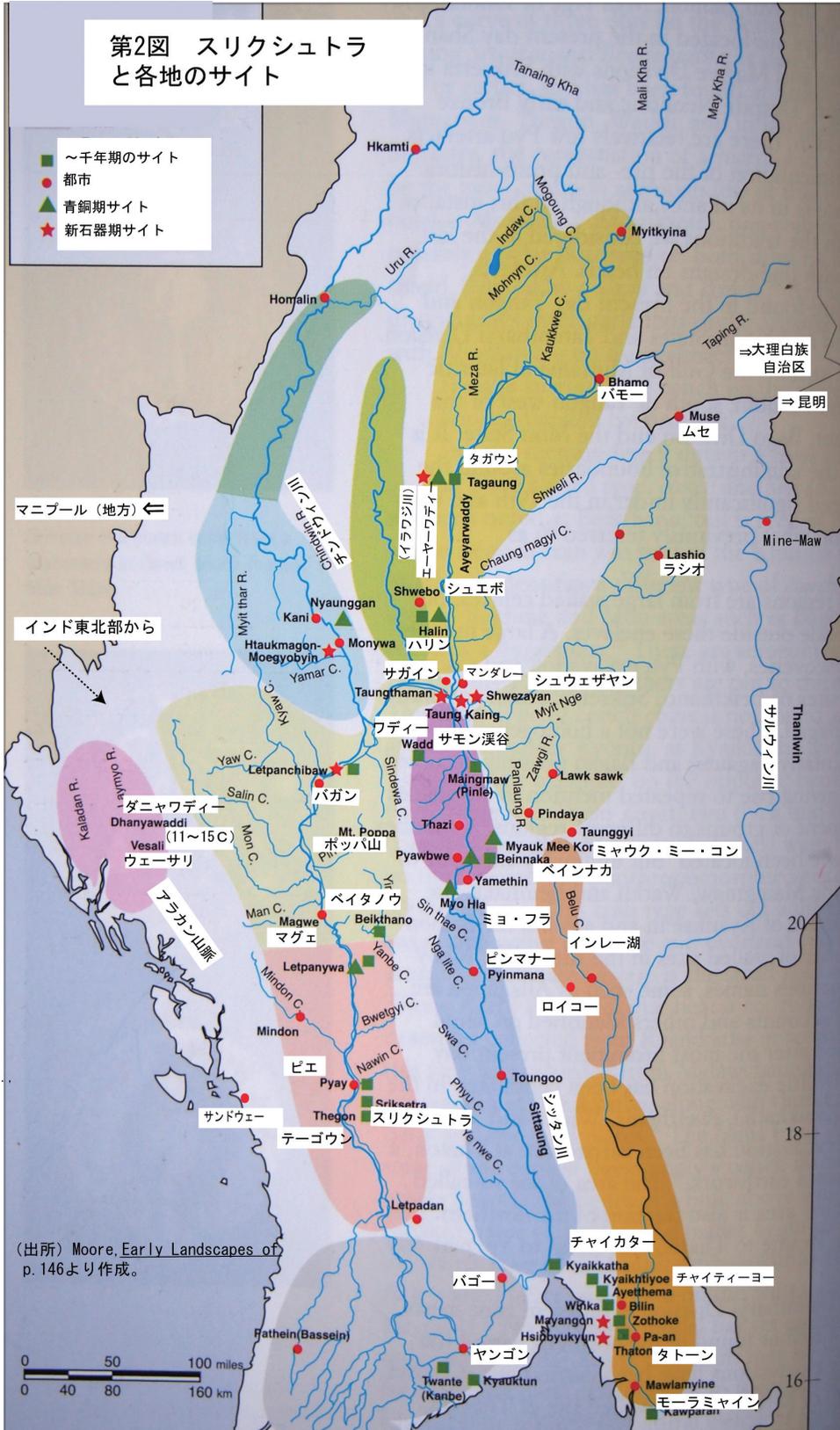


イスラム・ササン アイ典型（本文補③）

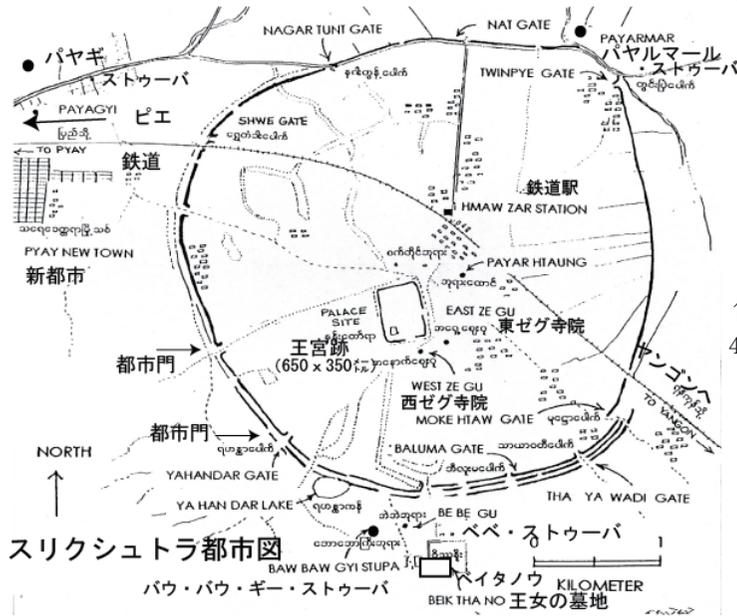
線紋護符→メノウ、カーネリアン プンテック



⑳ピュー銀貨 左表裏2つ（W30ミリ）



第3図 スリクシュトラの都市図と都市景観



(出所) Moore, *Early Landscape...*, p. 168より作成。



④ ↑王宮跡の北東に設置された博 ↓市壁の外側の堀、その跡に広がる水



⑤ 田



←ヤンゴンから北西に約300キロ。ピエの町外れにあるパゴダ。ここから古都スリクシュトラまで、8キロ

↓東南の門 近くで現存する市壁 説明碑(右)では、門の外で、鉄の板から突き出した釘(大、80センチほど)43本が出土



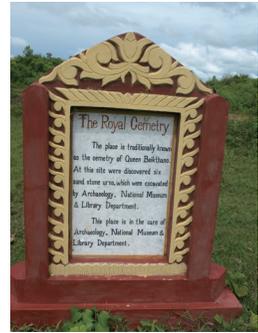
⑥



⑦

↑巨大なパウ・パウ・ギー・ストウーバ、南門から250センチ高さ153センチ 小さな白い点は、台座に立つ人

①



↑ベイトノウ王妃の墓地跡、4つの甕棺が出たと伝える

②



↑ベイトノウ王妃の墓地で未発掘の甕棺 ↓甕棺の遠景

③



↓参考図：ピュー・コインのモチーフ 変遷 上 初期 下 中期。典型的なハリン銀貨は図1⑳参照

初期：バゴ



中期：ベイトノウ



(出所) Moore, E, 2007, p. 143, Than Htun, p. 105より作成。

第4図 オケオと東西交易



(注) 昆明、バモーは、第2図右上の補足。
 (出所) Manguin, "The Archaeology of.." in eds Glover & Bellwood, Southeast--p.284 より作成。

第6図 スンガイ・マスとその水路



(出所) Jacq-Hergualc'h, The Malay Peninsula, doc21 より作成。

4②



↑ベトナム南部 ロンスエン アンジャン州博物館入り口 ホーチミンからバスで6時間

4①



↑ホーチミンとロンスエンの間のメコンデルタ

→オケオ遺跡 建造物址のレンガや石が残る。ロンスエンから約30キロ



↓オケオ遺跡の水路跡

↓オケオ出土のビーズ 本文参照、なお、左上は典型的なインド・パシフィック・ビーズ 1図③右端と同じ 中段左2つ ササン

4③



→中段3つは考古学博物館に展示



↓スンガイ・マス跡

(出所) Manguin, P., The Archaeology of Early Maritime Politics--p.290 一部

6① 現在は居住地



6③ ↓



↑スンガイ・マス遺跡の状況

↓ムダ川河口付近

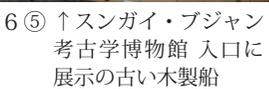


6②

↑1821年タイに抵抗したスルタンの記念門



6⑤ ↑スンガイ・ブジャン考古学博物館入口に展示の古い木製船



6⑥

→角ばったアイビーズ、モザイク部分を融解 (出所) Francis P., Asia's Maritime --p.97

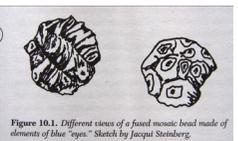


Figure 10.1. Different views of a fused mosaic bead made of elements of blue "eyes." Sketch by Jacqy Steinberg.

